

松島句集

五ノア

玉月の室あるも一帯の
友人ノアにたる

えれのふに鳴るる思くくらはは
母乃ある玉月七日の寒ささる
川風のさるを吹かば梅のくく
山間のさるを眺しとさく梅を



かゝる濃の月の輪くさく梅のまね

陽叢草

まろの枝の風あかりと陽叢草
あやて起すおろかし是やまきこる
麻の種之粒持てしまくこの
号の目くられこりきーの
くもすのまへ新くつる陽叢
くもすやまきこる

反故焼てくもすはく夕ら
子を唱ふる老のあくとく

わすこ

水呑てあしれさあたるハ
かすまや死んこりりてり
かすま日やあおきこるふ布めの里

江の

江のくさやこるなるちのるのま

ふりまひよすしーいむいーいまの山
水とぶさるるにーしておくとあらは
東風よくやん歌の流の江連をり
鬼もや井戸のちくふる木のち
又草の宿や木まら茶摺小
散る木の片をりしてふひをり

所悔育のものともりうまの雪
ときんふりてつるれを淋しき柳は
池水のふゆはく小田の片をり
雪とけや近寄りにする 妹の歌
池の雪ふりてはくふりておとねたけ

途中

庭のうらむらむの山見ふまにり

九山の館の流る登りて

酒はゆせす子れの外の山のこゝろ

大塩とりよるやとる

くぐむすの葉にも似ちやれその家

春の草をいれつをねまは梅のま

むくさのな

去年の秋もよのあゝの

もたにあうて七夕や拾ふて

度す巻の根とよの

玉をさすくくあうきて又よ

の初らすこをの

巻の去程の繪の松あうれ

流まけてあゝをくくや廿四日

草花何れをくくく

かゝれはくくく

つれて

歯の骨賣り後よもくくく

やとーせー南の湖を渡る
る事小道二里をちう山に
小まら〜とリ子梅をよき岩を
て花の肩ひ〜ききたるとカ〜こ
おちくの名まぬる〜共人の
白髪あておのつち〜沐浴玉
骨のらちせ〜れて

しらく流ある筆の足こ梅のをね

都陽の宿を吹て
赤岩の陽を
め〜〜〜
草米こア〜

家らちめく乃る美るあ〜郎
陽と〜い〜ものらる〜と〜
まのめらるもなつ〜
つく峰く〜眼〜見ゆる〜
のら〜りも前川氏の志ある
と〜流とま〜く

菴のせてあり〜岩よ初日さす
玉月四日前川氏のふか花を

上ノヤ各人のあつし
長^{ナカ}嶺を越て谷にあつた
峠にあつたあつたす
事としてねると思ふ中

深山やあつたのきも
境本よりあつた
もつとも高き
風力をさく

とをさす
る
雪らる
英里い
途ふ

彌草や
小
り

概ぶたくまらううすのこ兄
とこのたるくのもよあう
て大ささはあういんさるは
をーいんさるいそてのけ
あやこーいんさるは
あーいんさるのいんさるのあう
を母いんさるすもーのあま
あうてとほのこーいんさるは

えのいくすちとほへる
ておとほくーいんさるのあ
あま概てあことのおこり
れくくたうまきたくせ
そと山のけいんさるのあ
あてとてあるといんさるの
るるちあうあ

ハのトイテ若あすのあまあす

鶺鴒人市を送つて黒に尾
おてとて打出ぬるとあ日こりう
実るしくた枝の氣の毫のともく
牝うすこ道たりしくとて和山懸
ふさるようもすすかかんつばし
かたしむさむさのうららうらうら
雪と出風の吹まぐ日滝谷川
こゆるあさうにけるよう念の

ともすするるりさるて

小服終つておたくあり田原を

中止のあさこのたにいりり
ちひまきささくそん度の松が枝
のひらまきい甘きう色の鏡乃
ちしううにあさちちす

吹風のおやまくまねや鏡の音

右馬原の里の
つくろころの

甘き風の境は
すきりうう西の山間

おつきは睦月より
祓祿の末を仰り
の歌よしもと
夫木集

こぢく師乞の末の四日孫を

もくげしや

勢やおつきのみまゝの子ら配る

あまのうゝの里鬼子との

ふかたのこしや

おてはまあるまゝ一寸の外は松の風

あゝいゝやすまきの廿廿の波の末に

芥さくらて出たりる詠のすこしは

春のあゝおつきは睦月より

くくみすや掃枝おまゝのつらさる

くくみすは田のあゝおつきは睦月より

あまのうゝの里鬼子との

大津絵はあゝおつきは睦月より

あまのうゝの里鬼子との

あまのうゝの里鬼子との

二年之日芥の物語

高田氏より京の何某の繪を
ふくさしを打ちすこころ
まじらふこころぬらふて雪
さしいとゆかりりれ

蒼きく坂のさあさく目くら
貝をふくこころ

繪や浪つづけて双子

高田氏より京の何某の繪を

たる傾城の澄せよと乞りれ

赤人の眼のすみれ、
夏の月まはるるとおとしれに
親と子の仲のまはるる蒼の
床敷を打ちやれと一人の
つら子や野のまはるる
ふま昔の白ふさく人
りさ紅をりけしとよ柳

教入の忌のつらや五ふー
まふ子ののまふとふまやふの
さまのせと第の鬼のつて
腰のちらすふつむのむつり
たふを今長坊賀のふはむふて
春草のよまふまふを龍まふ
ま柳の中ふふふふふふ
ふ思ふふふふふふふ

まふ日のまふまふまふ

松窓句集

夏の部

あふもこの根つらぬ松を物たし涼
榕つむぎをうらあふらのさきさき

むらさ

かくや飛脚魚のしりぬきをきき
段ひとくふ青きる道なきあふり
山の踏もえりもあふりもあふり

あつらふや花の家の子の歌
鳩の中をさしめけたる麻の子が
妻と子と大車のはらう溜し
あれは娘の縁をくんで
さうり家力自に病とあや
母の句し

夕立のすいやう流の山はく
たぢふ木の大さ流きる後を

風はさるるさやあう場の茶の絵仕

あつ川舟中

もろん鶴の羽ふの山は日流

途や急雨のさし
とぢふ

あれは娘の縁をくんで
さうり家力自に病とあや
母の句し

まを桐のさし見たり雪下り

出羽以聯ノ時

玉くるや森る宿まをそ葉子花
そ一娘のひとくはあれよらんと川
まかちあつと惟子時のかたむらね
形直ふらひとあれたう小ね岩
甲子にまき粉のあゝあゝをいぢりぬ
麦あゝ一一人の卯の辰のさか
押あゝよこれぬけ一の茶をい

まゝと雲や草の掃りし人のと

字考

土用東風天の川より吹らるるを
うあられらるるの氣はす昔の
ふ語りあつたあゝあゝもや月
すほの川のぬくしあゝあゝ
惟あゝあゝあゝ
出づりも海鳥のすゝの捨くを

あやうな川に舟を

くわくわくと流せ

おとまたんずあまの海に釣糸

ふちりうちのをさちあれとて

只舟あさりをとこあくと

大程のふのあしやこす

たむけの茶の店あて送るおくり

ぬ換へひさこ押すえを

あつらすうちあつらうよう

ひさう、陰に海をかくと

うごむたしとるも流し

あつらう涼したしとる由のま

玉川のすくハ米甘漬よる

りくくーの雲をなまよる

之あつら流すまがーる外

出さすゆくく大里たむけ

こころもろこころもろ
のよふたかきさきく
免くりのちるのぬりも
すこーたいふさるも
いてその西の限りも

手あると心あると
まのふれぬ心ありの
やまありにすれを麻よ

のよくくるされて道のち
らう路ほそー心しらぬ
ともれぬる中さちま
らそるもろこころもろ
あをて虎声のすこころも
老ーらぬもろこころも
さくあーのちちせも
真天の降雪身なる雪を

くくすくくくくくくくくくく
川の夏秋すくくくくくく
日景をすくくくくくくくく
のるまきくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
てきくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
し小園とりくくくくくく

名水無月九々の云々

途中中流流山を仰て

草おろくくくくくくくくく
長丘をくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくく
石海をくくくくくくくく
さいつとくくくくくくくく

つふてふれしらの香とら
し下流もらんや答てこふ
あかりといそくちひこと
と母たりねむに寐人たり
帷子のたもとやくちを杖の浅る
小千答こあつて
水そ月を日
朱子らり草の輪くらよ眼のこ

西足山ハ六年春

西足山下のある菴よて

春一傍よさきやうの道上一の道
沈仏のやれしきやふ一のや
投込てえたまき家へさちちき
志られちし淋しく娘一昔はら

藤林の歌をて入道うし
ある歌もちいさくうて双の
實より家

双ノ関ハ十府ノ
町とこもアリ

松崎、ハリ、款、つた、あ、く、り、の、
ふ、く、と、ま、や、ま、か、ま、あ、る、甘、草、の、
豆、の、あ、と、ま、い、る、あ、て、い、る、
あ、た、ら、ま、や、う、ぬ、根、よ、う、
さ、く、く、は、ち、う、み、お、昔、の、
あ、あ、あ、く、見、や、ま、ち、い、る、
乃、香

松窓句集

秋之部

やう川を生えり逢中

草すくもせりくさきあはれもよく

子ちのくのくろくさく
くくくはる山のほくのちのよけて

山のちくの木のちのく
あれと君のちのく 人九
ちのくちのくちのく

ちのくちのくちのく
ちのくちのくちのく
ちのくちのくちのく

ちのくちのくちのく
ちのくちのくちのく
ちのくちのくちのく

評述

あゝ

冬の名のきつこつとあつた旅すか
こぼれくのみとあつて大雲
肝つやーとあつて又家
困り旅して鬼柳くりあま
くつとあつた松風ふくあつた
父のきつこつとあつた
教ふ事と忘れど秋のあつた

母のきつこつとあつた
栗の家とあつたやくあつた
本一のせり新雪とあつた
佐原山とあつた

小舟の間の世とあつた
待本一のきつこつとあつた
たろとあつたや捨つとあつた
志る川のちとあつた

小秋さへ川と身はよこたへし舟を
か月にこひくふこゝろもか
あの下よりうらなひあせし
小秋さへすこひ

秋のこぼれをつる者よ秋いそ
あのみ直きこゝろあせし
たよここの園のひろがるを
月といつきたせそこの宿たはり

こ日月をてふをあせし
山陰の地こをるいそく
るもにも秋の白ふり餅り

一區王寺よりあせし

急ぬこ草道より下にあし
大見の葉荒るそをる垣根
山陰やあせし位人のりこ

一歩沼よりあせし

床のあし——ほろりとせしむる
山にある家のや——あまのやこ

水もや——竜巻もくともうれま

鄙ひこころあはれいふる
店もく人の懐とひもつむに

本権さけむくげさけとや梓あり

位麻の菱——結了、苜せり

さ——念して懸く、秋をせとれぬ

さす月のあまをやすきとほの那

蓮を花密寺のあま

堂守りう、茶葉黄入追はる鳥小

松のふきせらるるを何と秋の月
うけ登る脊え止あねやあきの月
波うけの合歡廿外ふよ、秋の月
松を想ひ

谷月と涼しき苔の白く那

雨十四夜

ぬれさるる月のぼるまある月を
えの川名うまうれい今音

の月もいーいあうぬらせある
宿の籠うけぬ神帳の中へ
くう入るい

あすのねもあをゆきん月やいらた
をさきこいあしやそい思ふ

月のまを波のよるそてくれ踊る
浜えの神紀

東のうらうらあたるやは連の風おもて

乙のまじりこちかめたり〜おさ
たのこのついのしづのまじり
〜めれたる

冬あて〜さしき〜た小櫓の突
押しの夜泊

つゆおのぬねのさぬく〜サ火櫓火
こ〜れすゑ〜碓の根と海
ノミ、岸濱四里さか〜の

つらね〜ゆ〜波〜し
うれ〜

秋風のさ〜もあ〜も〜寒〜さ〜
乙は津のこねさの月夜
ひ〜く〜あ〜も〜ん〜と〜
待〜れ〜日〜た〜う〜ま〜あ〜ら
〜〜〜一〜の〜光〜映〜や〜
の〜ま〜吹〜つ〜け〜ら〜う〜雨〜や〜

ねしふるふとくくこいふら
ちくち川を石ひくくう
下玉白きとせりふとさう
雨の神一御ありままするん月を

五智

すあをまろ権の風吹月さして
亞江津よあうおもあるこ
市振を見河すのこゝる葉の花

流るる道二十里を

返法

黒井、出る間

たあちこ乃つれ、道や芦の中

弟山の権原より

草の葉のおそらく糸、茶屋の茶は
中まぐにもくくられう旅のと

秋日午後

あふらうつちうらひ
さても山さうさう
る人のちやまよひ
るよ

西行

ありしち坂根の昔白うつら
より飛くて帳とけやらす
ぬこの日さうさう木室よ
入て

あつ路このいぬ身よさるる月の

よりの上の敷ふし
あのもんたしを
こほらぬとま

西行

あくらあつ木の碑のまよ
りてさるる宗師よ
あつこさるる若の氣あつる
くらやにちよるるの

いふまよ

あつ中の降ふ天の木の

仲秋無月

雨の月晴んりしや師を

あつ

あつあつあつとあつとあつと

あつあつあつとあつとあつと

あつあつあつとあつとあつと

あ

予も多し月日の山日如
のうきしと荷あつても多し
八朔の扇ぬくようまく麦を
去早さをさるくの句に色
ある家くをさるま早旅況
はものこほさされん峰壑
しと流るる河さあつちを
このしと

おろく月見く人の山ま
大さほ英里もあしし何
得きの神に何神やふく
おろく人のすくをわい出て
命ふ
水もやろんたる美上の甘菊と家
文右の山は梅の空をちり
に戸をとり

梅屋のいさぎのいさぎの
こゝろを思ふ

すまや教るやこゝろを思ふ

あゝ—れうねよ

あゝ—れうねよ

梅屋を思ふやこゝろを思ふ

いさぎの田もいさぎの田

いさぎの田もいさぎの田

いさぎの田もいさぎの田

細いさぎの田もいさぎの田

せうら

麻火を—流すやこゝろを思ふ

いさぎの田もいさぎの田

か—のいさぎの田もいさぎの田

門馬よりいさぎの田もいさぎの田

晴きついでいさぎの田もいさぎの田

いさぎの田もいさぎの田

松邊まきねのまきねさくし
え王守とこがし田んぼ
二句

考るやあまういほまのこつち
松のこつちのせくし
うけらひて夕のほのさよ
麻留とひすの木よおま腰
荒れさうは口こいさおや

おつちの道四十歩さくれ
よーまきあーのらと矢し
うらちそくくさるや
いとちかえて草のぬき道下り
山の目よあつてそ端
菊ことせあまきねのこまよ
申る寺の十日の衣をて見
せーとらふて川邊法師れ

り使子に家へ来て

あすは菊よりししきりて

おきし人のもとより

本程さく秋にいづあてらるる谷

光りも

しゆのまよふさしきりて

十之ねも中なるきりて

よね文てるりきりて

ふゆの月やまじりのまじり
川流の流おさきりし月ね

よ一箇に

物たんとつけてみし馬の首
とくは物行あけし海苔の上

八月廿七日 祇詮、やま

とあつて

ふゆあつてし月のまじり

古く〜良辰に盤石を止る
藤屋にあつて軒の玉火とく
〜更紗

月々あつておのゝあつれとあつるよ
中辺地を出入り核濱迄
こゝとら流る

一日来りて松のぬきや家寒く
八月七妻止りて〜すむらゝ

宇曾利止

山草やあつれとあつるの海をあつるよ
長月の又日よきて又間とよ
濱子霜鍬を〜りて舟
を〜りてあつる八日やあつるよ
其見の起る日あつるとあつるよ
たつ大波の二あつるあつる斗り
つゝの昆布の〜あつるあつる朝

の嵐のそねたつ子道春ぬや
おせとハ東風しりけるよ西
よりやくりせハ十八里
乾乃方龍飛白との瀬あま
くくまうれはる物かすさぬ
其の頃おのあさう目んく梳
取るちかしくまし及すしじ
もあさうちやく逢たまき

布席の住地ハおさうさー
出て其ら七里とよまのち
晴のく村ハおさうくさう
見ゆれと云くしや居を便
おとれハ一ハのおとくせあ
てハすくよ我ちとらあまも
せんするなくて

おもふにも波を志さうの月あつぬ

たられちしよいしもの々甘菊は若
おぢーやうい讚岐阿波
肥前庄藏久畑松前のも
集りすりあに重場きうれを
もてちりきよやせのよく日
を蘭をくくそにをのまき
なゆあふてまきくくくたきき
くさーくさー

待よの鏡ーまきく白まきー
箱鍬のくち七里後まで
呼をまきる管やち方障納屋の口
大呂よし
信の巻も指のちよもれ蓮の飯
箱鍬を出入り常列とよ
破院をくちるくち上臨乃
死くちあうりくちくち

飛川よはくはてあつるすく
にるうぬとわむを実朝乃
管よるもいとちるしく其こ
るもかえす高砂子かき、のけ
さ中理やり侍りぬ、母乃玉
ちし、ちるうつせ貝よ波の朝臣
の墳とかき、ちるうてよるし
ちるこのよるあ、ちあはれてちる

ししきうつる極よ旅のたの
免るきとこの月さ、くらあは
るあはうしりや

つて見ゆる磯かぬたしや、くら月
あふるえを、つる路も、之さ人、は、今、さ、年
ちる、く、い、ま、あ、ぬ、も、有、く、一、二、三、津、原
秋、さ、け、く、あ、ち、う、く、さ、林、く、あ、ち、う、く、記

奇萩恋

くらむとら小松のりサるの事

奇神祇伝の良杖

あしこぬ神のまろえり伝の月

石
けやんい部まらもの好まの題

家腰こつ子さる乾あし

俳諧のるく直を供まする

了り百さ

室の中のし累節近し出さや

まきの花らんまやく伝伝の月

しんわ部の田家ま

田のららるるのあやうをまくの

傘がしてくま世えりままくの

丁の尾もそり九月九日

年員い題目いこといかいまい

常北いまやくい酒い破いあいとい

子ちたい向い遊いしい隠いれいすいらいも

きんしゆ

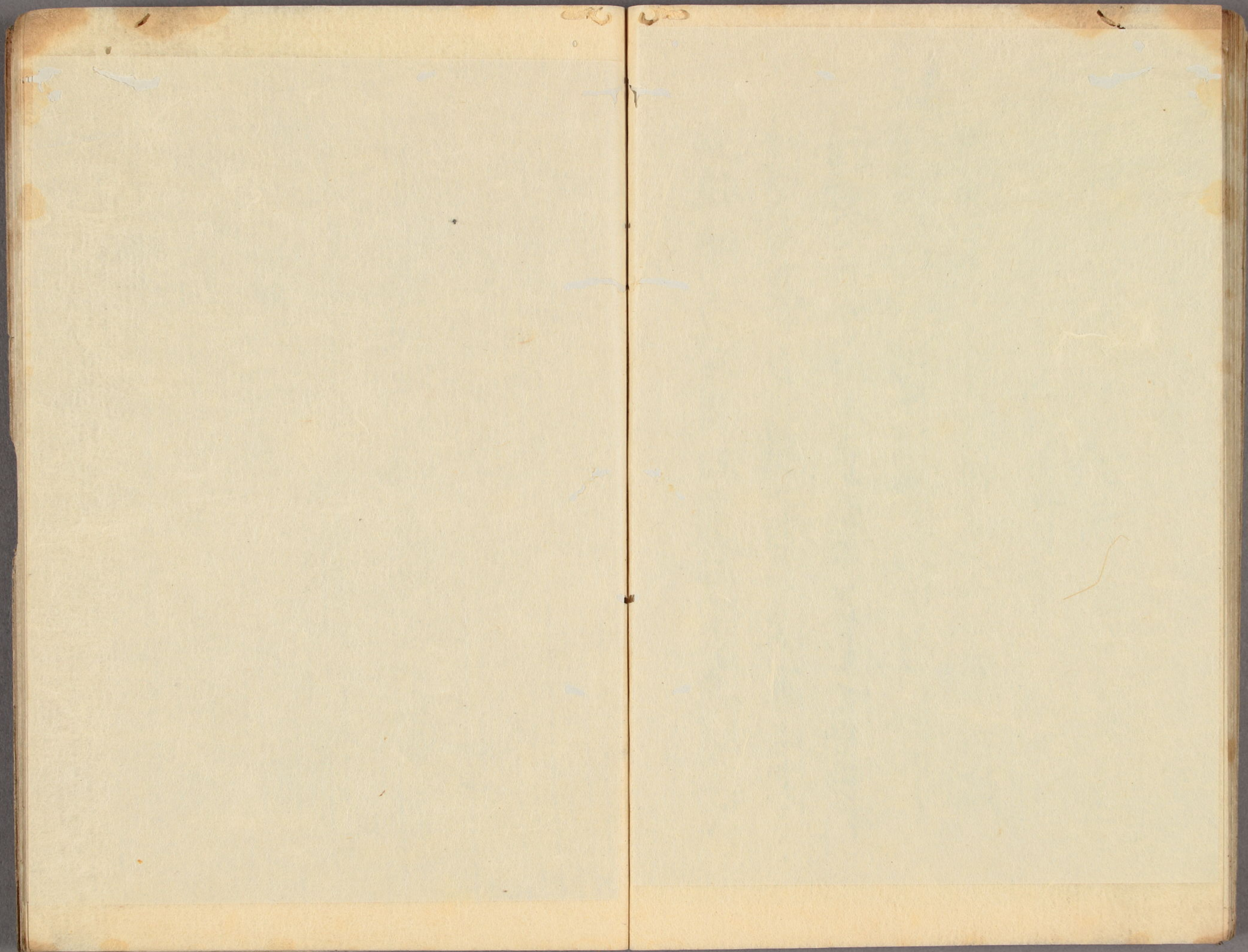
菊は秋志く髪をくくるをま

あまの人の家より

旅するによこの人のと葉の枝
ちの香菊の香にも年より
菊を身より年より玉の立田を
あまの人の家より又の人の
たやまの舟の嵐や秋乃とせ

五位破るれくめちけする野分
はさも存るすけむくの麻くさ
朝寒やさしくよ墨をとてをち

松さしりるもつける本のり
口を弾人のつすくまこのたす
あまの生にみねのさしりる



松窓句集

冬之部

出としらぬすもや素もつぬ葉道
山人と木多ありすししを介らぬ

出門口号

いつの旅も何とせぬ事えぬ交
とよかくし藤がぬむす入何人
家あはれとちたうてけ大足

脊比高よしちし毫臘ハ枯テ

ひくま

野田向やさそこ比は湯く降つてく

りゆまおなもとよて

山水や鴨乃羽を耳さるれ込

朝茶の玉くちと居よか冬を

冬麻のあぶり近を飛むしくれ

青牛比せきく委や池乃鴨

初冬将の歌くもれさるりし水

冬二月折角あそぐ濱ちとる

尾鴨の日さくみかく年りし

山鳥のおのゝ旅地も雪くさる

松川をくむあり

さむるに羽むけの山を尋る水

草子名偶作

鶴とさく入子出た寒く中風く

月の相をきこくなくするを甲の声
瘡の痛のいぢるを甲の音
ちぢて不田のくこよ案内せ給
ふは利へり遠年

くたしゆくや住にもおけし足二本
田ノ麦を前玉しゆけずうん
其角よりのおれし吹井の鶴も
おのれり切るよをくこよて合

は日とやほしとや

冬に乾日のおしれしりくちを踏る
塩より踏みよるちやさるちよき

池魚の宿るおし時

飛鳥形く害の降るう家のお
降雪の深止志まこくちあは

あゝ寒い

朽も家も焼く一回とせのなを

旅のありけしむとせしめをせしむ
花王並し王神のふありと
しふ事ありと守て朝とく詔
傳りぬありにさくえゆれを
并及の片隅とあり居て
り事をたしむ里の子らの
裾とありあるものをさし
かくともぬくあつあり扱交

あこちびてさこけしけれ
足袋とるぬこよれし玉あり
まゆあめをあらぬのきく嘘とたぬ
竹の葉のむくくしき実をさ
るるしきおもしるけし電
神を月をしあたらち
よるし眠る
蟻とる舟も冬にうつり

十一日夕の夜

墨ついであすを待てて後山に

交古遊りありし

大せつ子埋むらむりありし

交古一宿の人こよふありし

とくし替れぬ旅それの里に

あしに吹おろし礼に

たより那も心より師をの月から

たのしみめくららるる波るき

れ一まのこもそ旅のこいに

ありれらるるまこ

か旅よりみれ不用とみくぬ冬扇

死をも定も思ひ交はし

道つれし人の波板と

を尸旅るよもまらふ

白も不用よるるぬ

前川旭江のもと

大なる舟をつらふ事あり
とておの目も入まらざるを

母恋

鎧の子のあはれや舟のたぐひ供
いとけ那又の舟馬ともにも吹
たをさされしはとて是れは
船友しふるもあまの明れお

元治一きハ世守

本町のしやありとらわらう原厚ふく
福崎とよきう知内しりあ道
又十二里七里の海に道はあり
四十八歳も出の心中之芥りの
楊子くつり一付

お茶本のちるはせくねや都の煙り
あらくらあし

きりれと半の母一月の浅し詠
芒野も一寸垣一重雪の降れ

むかしのむつたふの法師

花のまらふ花さくらつりて

年加し花目もよきちとを六種の家

かくふに師をのこし日とらう

己のそ

のそふけにやうひるや炭けあそ

小坊主と風もひらぬわちる木の葉
尻まうに鴨をて入りぬ門乃口
おられし所ありはるそこのあと

湖と

むら帆のりより寒くあつたか

百のそら

書





